

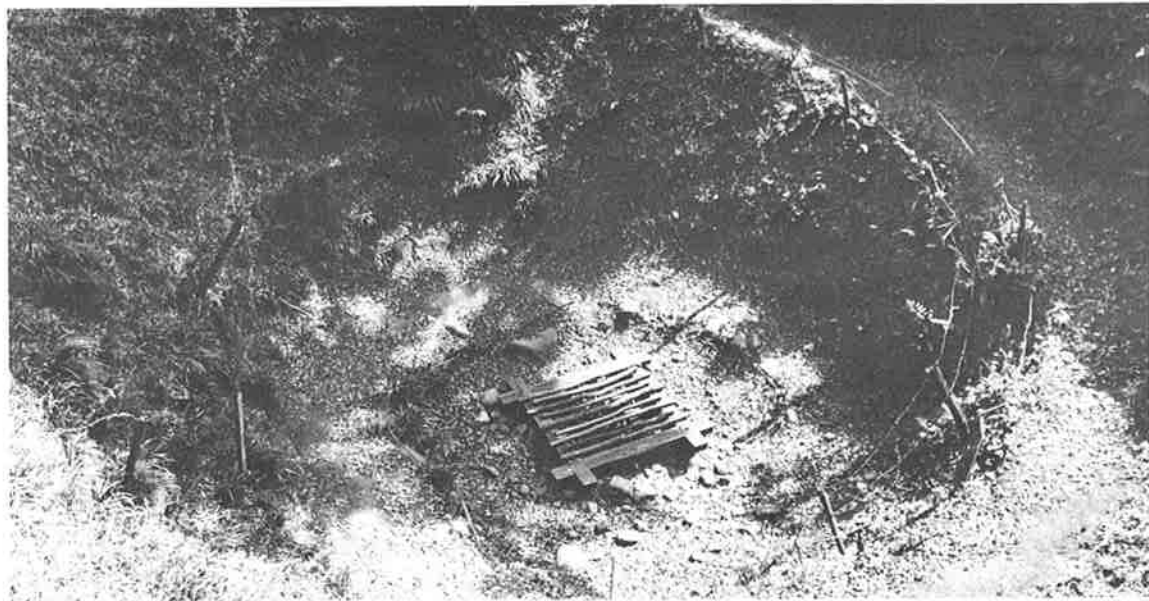
財団だより

多摩川

1984. 6. 第22号



コサギ（サギ科）夏羽は頭に二本の長い飾り羽ができる。



五ノ神（羽村町）にある、まいまいず井戸

■ 多摩川博物誌 ■

⑥ 五ノ神まいまいず井戸

青梅線羽村駅で下車、歩いて5分、駅の北側の道路端、羽村町五ノ神に都史跡「五ノ神まいまいず井戸」がある。

まいまいず井戸、螺井戸とも書き、逆円錐形の大きな穴の周囲に、らせん状の歩道がついていて、これをたどって底に行き、わき出る水をくむという最も古い形の井戸だ。その形が、渦巻くカタツムリの殻に似ているところから、この名がついたらしい。

土地の伝説によると、井戸が掘られたのはざっと1160年前、大同年間ということになっている。多摩川の河原に住んでいた人たちが、大洪水で羽村の河岸段丘に逃がれて来た。それまで、水は川からくんでいたため、丘の上で井戸を掘る技術がない。3年がかりで、すり鉢形の大井戸をつくった——というわけだ。しかし、「新編武蔵風土記稿」の五神村のくだりにも、井戸は「近キ比作り三井ニアラス、真ニ古様ナリ」と古さが強調されているだけで、大同の文字はない。都の調べでは、井戸の形と、むかし改修のときに青石塔婆（板碑）24枚が出土したという点から、中世のものと思われ、鎌倉時代までさかのぼることができる、という。さく井技術未発達で、そのうえ、筒状井戸が掘り難い砂れき層地帯だったため、こんな形になったらしい。

井戸は、元文6年（1741）に部落の人たちの手で大改修された。これはちゃんと古文書が残っている。部落24戸が、1戸当

り350文ずつ出し合い、総工費一兩二分、2月3日から17日まで人足のべ605人を繰出した。このとき、井戸の底の水口を石組みにした。石は近くの多摩川から牛で運んだが、このときに牛が倒れて死んだ場所が「牛坂」という地名で残っている。改修工事で、青石塔婆（板碑）24枚が出土したというが、現存していない。

井戸はその後、隣りの熊野神社（現在の五ノ神神社）と共に部落の中核として共同で使われた。近くの街道を行く旅人たちにも、神社の緑陰と共に親しまれたことだろう。

明治の末、井戸の底が浅くなったので、井戸周壁の石積みが80センチほど積み足され、井戸の木わくがコンクリート製になった。

36年に羽村町営の水道が完成、井戸の使用者がなくなった。同年10月、都遺跡から史跡に指定変更、翌37年から2年がかりで復元工事が行われた。

現在井戸は地表面の直径16メートル、底の部分の同5メートル、地表からの深さ4.3メートル、水口の井戸そのものは直径1.2メートル、深さ5.9メートルある。井戸は金網で囲まれ、由来を書いた立札、ベンチなどがある。

「武蔵野風土記」朝日新聞社編 1971

多摩川散歩

●吉野から御岳溪谷を歩く

日向和田駅で下車したのは朝の9時を少しすぎたころだった。梅の花が咲く季節は行楽客で賑わうこのあたりも、いまは人もまばらである。奥多摩の初夏は緑濃い5月下旬の平日がいい。

ここ日向和田は、秩父多摩国立公園多摩地域の入口で、神代橋から眺めることのできる「吉野峡」は、高水三山とマッチして美しい。吉野梅郷の5月初旬から6月梅雨入りあたりにかけての季節を知る人は少ない。いまは梅の実の収穫期なのだろう、小型トラックの荷台に積まれた青い実があちこちで見られる。吉野街道を少し南に入った集落を縫う細い道を右にとって、真言宗の名刹即清寺についた。いつ訪れても静かなたたずまいが好ましい。少し西に歩くと愛宕神社の石段がある。私はここを登って神社の境内から多摩川の流れと、高水山から青梅丘陵につづく^{かつがひ}芋垣城跡や三方山を眺めては、その昔この地方に勢力を持った三田一族の、つわものどもの夢の跡を偲ぶのである。

すぐ下には文豪吉川英治が住んだ草思堂と、その文学を記念する館があって一般に公開されている。時計は11時を廻っている。昼までには御岳駅近くのそばや玉川屋につくだろう。かなり急ぎ足で、車の通行が多い吉野街道を横切り、多摩川を奥多摩橋で渡った。二俣尾は青梅線（当時は青梅電気鉄道株式会社の経営）の終点であった大正9年までは、^{にっはら}日原や小河内に遊ぶ人々で賑わったところであるがいまはその面影もない。

足を西に向け、青梅街道を少し行って、秩父鎌倉古道に通ずる平溝部落への道をとる。このあたりの風景は蛇行する多摩川の眺めが美しい。小さな橋で平溝川を渡ったら左に折れて^{いくさばた}軍畑駅に向う。

軍畑駅から下流に向かって多摩川を眺めれば、その美しさに酔う。駅から南に下って沢井駅方向に道を辿る。下に大きな母屋を中心として、「沢の井」の醸造で知られる小沢家が見えてきたら、踏切を

東京都環境保全局 梶 玲 樹

渡って青梅街道に出られる。御岳溪谷遊歩道の中心、楓橋から御岳橋までは北岸に行くことにして歩を進める。ここは溪谷といっても両岸が切り立っているのではなく、清流と点在する大きな岩が実に巧みに配置されている。歩く人が多いためか道はよく踏まれている。対岸の杉林の天に向って整然とした姿が美しい。ほどなくして、御岳橋近くの園地についた。ここの対岸にある玉堂美術館は飛驒の民家を模して設計されたというだけあって付近の地形との調和が美しい。時間があれば見学をと思ったが、腹の虫がしきりと、そばやを催促している。

カヤ葺きのそばや玉川屋を出て、御岳山ケーブルカー下行きのバスに乗る。電車もバスも平日とあって空いているのが有難い。ゆっくりと窓からの風景を眺めつつ、初夏の風を受ける。

きょうは御岳山の民宿に泊って、明日は、川井や古里^{ふるり}そして鳩ノ巣あたりの古い道を歩くことにした。もうその鳴き声がか聞こえなくなった「仏法僧」がもしかしたらという期待を抱いて、ケーブルカーに乗り込んだ。

日向和田から御岳にかけての散策コース



私と多摩川



東京オアシスづくり研究会 三上 温子

去る3月18日に行われた多摩川兵庫島近くでの野鳥観察会に参加して、35種類の野鳥をみる機会をえました。岩つばめがやってきたのは、ちょうどその日でした。日本鳥類保護連盟専門委員の原さんに教えていただいたのです。“カモ、だけでもハシビロガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コガモ、カルガモ、と5種類をかぞえ、すばらしい水辺の自然をみるのが出来ました。私が多摩川にそそぐ野川を守る運動をはじめたのは、8年位前のことです。そのきっかけは、世田谷に下水道が普及しはじめた頃、中小河川が暗きょ化されて、まちから川が消えていったことでした。主婦たちが下水道の勉強をはじめて、大規模合流式下水処理方式はよくないと分ったのですが、すでに川は埋められて、仙川、野川だけとなってしまったのです。身近な野川を見つめることで、川のことや水環境のさまざまなことが分ってきました。

野川を守るには、水源である国分寺崖線からの湧水をどうしても保全しなければなりません。2年程前に、国分寺のお隣りの本田さん（国分寺市長）のお宅にお伺いした時、市長さんのお母様からお聞きしたことは忘れられないことです。それは裏の雑木林の大木を切ったその時から、根元から出ている湧水がぱったり出なくなったというお話です。大木が貯水池の役割をしていることを証

明してくれたのです。樹木は水をためて地下水を涵養し、その水は地下で行き来して緑を育てる。この何でもないような水循環が人間の社会と結びつき、生物の生命を育み、生態系のバランスを保っている。このことを考えると、新緑の樹の下にいる時、樹液が顔に落ちてきても、上を見ながら葉の先まで水がきているんだとホッとした気持ちになります。その反面、国分寺崖線の湧水が、年々減ってきているということは、とても心配なことなのです。湧水に関心を持ちはじめると、山に行っても沢の湧水に目を向けます。

数年前に西独のドナウエシゲンで、ドナウ河の源流が湧き出すのをみたことがあります。土の下からぶくぶくと湧く水が泉になり、それがドナウの大河となって欧州8ヶ国を流れ、ルーマニアで大デルタ地帯をつくり黒海にそそいで旅を終えます。この水の旅も水の立場に立ってみると、ご苦労さまといたくなるのですが、日本の都市河川では川の意に反して、真つすぐに改修するので、何か不自然さを感じさせます。本来川は蛇行するもので、急いだり息をついたり遊んだりしながら水を浄化しているのでしょう。シベリアの上空から見下したどこまでも続く森林の中に、大きく蛇行する川を最初にみた時は驚いたものです。

日本の川は地形的に急峻なために、また最近はその流域の開発によって雨水の貯留分が少なくなり、大雨の時は速いスピードで下流までできてしまいます。最近では野川も大分きれいになって、カモや鯉が常時みられるようになりましたが、水量が少し減っているのは気になります。私は多摩川や野川の水には、ゆっくりと旅をさせたいと思います。まちに緑をふやし多摩川を人々の憩いの場に、そして野鳥の楽園にするように、大人たちが努力することは、子どもたちに必ずよい影響をあたえ、すばらしい贈り物になることでしょう。

よみがえ

甦れ！多摩川

●市民大学講座「多摩川のよみがえり」

川崎市中原市民館主催

前号で報告した建設省による「多摩川八景」選定の一般公募には、約8万人の投票があったそうだ。流域人口が約400万人。その2パーセントの人達が参加したことになる。新聞やポスターといった精力的なPRが行われたとしても、この人数からみて多摩川への関心の高さには驚かされる。

財団が多摩川の問題環境にたずさわって10年になる。その間、多くの住民や行政機関の人達と交流を図ってきた。そこで感じることのひとつに、住民の方々の多摩川に対する関心が年を重ねるごとに広く深くなっていることと、それにあわせて行政の対応も多様になってきていることである。

行政の住民に対する対応のひとつに川崎市の市民大学講座がある。この講座はさまざまなテーマで毎年行われているのであるが、今年は2月から3月にかけて、川崎市教育委員会中原市民館の主催で、「多摩川のよみがえり」をテーマとした講座が開催された。この講座は、週末や休日を利用し計11回に分け行われたものだが、多摩川の問題環境についてさまざまな話題を取りあげ知ってもらおうとする企画であった。

企画された内容は、表に示した通りであるが、財団はこの企画について、これまでの多摩川研究や交流した学識者を含めできる限りお手伝いをさせていただいた。この講座に出席された市民は、延450名にのぼり、熱気ある講座であった。

講座の内容

- ① 多摩川の変貌と私たちの生活
- ② 多摩川の水、その現状
- ③ 多摩川の水は甦るか
- ④ 多摩川の水中生物
- ⑤ 二ヶ領用水と平瀬川
- ⑥ 多摩川の植物

- ⑦ 多摩川の生物と生態
- ⑧ 野川を訪ねて
- ⑨ 多摩川の文化
- ⑩ 私達の生活と水辺の環境
- ⑪ 川と都市の蘇生

これまで、住民団体のサークル活動としてこうした講座は各地で行われていたが、2ヶ月にも及ぶ本格的な多摩川講座は初めての試みであろう。川崎市は生田緑地内の青少年科学館にも多摩川コーナーを常設しているように、川崎市民の故郷の川として多摩川に向ける眼は真剣である。否、川崎市民のみならず流域の自治体全てがやはり同じような眼を多摩川に向けつつある。しかしながら、今までは河川敷の緑地や公園利用といったことで住民へサービスしようとする姿勢が強くなり、いわば顔を川へ向けた発想が強かった。ところが、今回の講座の特徴は、多摩川を背景に逆に住民が住む側へ多摩川の問題環境を提供しようとする点ではなかったろうか。「流域の住民に多摩川を知ってもらおう」。多摩川の問題環境を良くしていくためにはこれが最重要の課題であることは多くの人達が指摘してきたことである。財団もこの10年間、微力ではあるがこの点については努力を続けてきた。このことを、流域の自治体や教育委員会といった公的機関が率先して始めていくとすれば、その効果はさらに大きくなるはずである。

多摩川は将来どうあるべきか？ この点について明確な解答を出せる人は誰もいない。おそらく何世代後になってもそれは常につきまとうはずである。然るがゆえに、私達は多摩川を良く知り新しい世代に伝えることがひとつの義務とさえいえるのではなかろうか。

川崎市のみならず流域の各地でこうした動きが出てくることを強く望みたい。そのために財団がこれまで蓄積してきたものが生かされるならば最大限の協力を惜しまないつもりである。

《多摩川およびその流域の環境浄化に 関する調査・試験研究募集 - 第二次 -》

昭和59年度、助成調査研究（第一次）募集の中から、内定したものは、学術研究8件、一般研究3件で、研究課題、代表研究者、予定研究期間は次の通りです。

〈学術研究〉

- ①多摩川支川の水質と下水路の浄化作用に関する研究
浦野紘平(横浜国立大学工学部助教授) 2年
- ②多摩川上流における環境浄化のための水源林管理システム化の策定に関する調査研究
志村博厚(東京大学農学部教授) 3年
- ③多摩川感潮域における塩分逆上および浮遊物質の輸送について
菅 和利(芝浦工業大学土木工学科講師) 2年
- ④武蔵玉川における生活環境に関する地誌学的研究
玉井建三(亜細亜大学教養部講師) 3年
- ⑤多摩川の下流域底泥における有機物の嫌氣的分解
滝井 進(都立大学理学部助教授) 2年
- ⑥多摩川底泥構成物質の毒性学的研究
高橋 省(都立衛生研究所研究員) 3年
- ⑦多摩川水系の中小都市河川における水辺環境の回復
—水路維持用水としての下水処理水の評価—
川原 浩(㈱日本水質汚濁研究協会理事) 3年
- ⑧多摩川源流地域の森林立地に関する地形・地質学的研究
小泉武栄(東京学芸大学教育学部助教授) 3年

〈一般研究〉

- ①狛江市に存在した中小河川、用水、清水の調査—狛江三小地域を中心として昔の生活や発展を小学校中学年の社会科教材として活用する方法—
野村義子(狛江市狛江第三小学校教諭) 3年
- ②多摩川上流に生息している小型サンショウウオの生活調査と自然保護について
肥田埜孝司(地域住民) 3年
- ③高校化学における多摩川の水質の教材化に関する研究
—地球化学的自然観の形成をめざして—
小島和雄(都立立川高校教諭) 3年

本年度継続研究を含めても、本年度助成枠に若干の余裕が生じたので、第二次募集を致します。

公募締切日 昭和59年7月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号
(地下鉄ビル内) 電話(03)400-9142
(財)とうきゅう環境浄化財団

多摩川'84発刊について

毎年5月に発行しています多摩川シリーズは、本年に限り財団10周年記念事業が行われます。9月7日の予定です。

財団10周年記念事業参加希望者の募集について

財団は、この8月で設立10周年を迎えることとなりました。

この間、財団の事業は、多くの住民や学識経験者、関係行政機関の方々から多大な協力をえました。

そこで、財団はそのことに感謝すると共に、今後の発展を期し、講演とパネルディスカッションの集いを下記の要領で開催することになりました。

この集いに参加を希望される方は早めにお申し込み下さい。

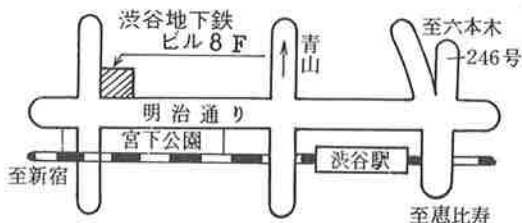
記

(財)とうきゅう環境浄化財団10周年記念 “講演とパネルディスカッションの集い”

- テーマ これからの都市と川と人
- 基調講演 多摩川にみる都市と川の変貌
高橋 裕 (東京大学工学部教授)
- パネルディスカッション 都市文化にみる川と人
パネラー 戸塚 文子 (旅行作家)
津 端 修一 (広島大学教授・都市計画)
中 村 良夫 (東京工業大学助教授・社会学)
加 藤 幸子 (作家)
コーディネーター 涌 井 雅之 (財団選考委員)
- 日 時 昭和59年9月7日(金) 午後2時～5時
- 場 所 東京商工会議所 東商ホール
東京都千代田区丸の内3-2-2 TEL. 03-283-7680
- 申込方法 ハガキに、住所、電話番号、氏名、職業、所属をお書きの上、財団事務局までお申し込み下さい。
定員制限の関係で先着250名で締切ります。定員以上の申し込みがあったときはおことわりする場合がありますので早めにお申し込み下さい。
入場は無料です。
- あ て 先 〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14 渋谷地下鉄ビル内
(財)とうきゅう環境浄化財団 TEL 03-400-9142

☆10周年記念事業準備のため発行が1ヶ月遅れました。

- 発行日 昭和59年7月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL(0488)31-8125